肥前国風土記の解釈上の諸問題

勝俣　隆

Some Problems on the Interpretations of "HIZENN-NO-KUNI-HUDOKI"

Takashi KATSUMATA

はじめに

肥前国風土記については、まだ多くの箇所に問題が残っている。本文上の問題もあるし、内容的な問題もある。本稿では、解釈上問題となる箇所を取り上げて、より納得できる解釈を提示してみたい。

一、弟日姫子伝説について

弟日姫子の伝説は万葉集において、松浦佐用姫とその主人公の名前を変えて松浦佐用姫伝説となる。その経緯については、既に拙稿において論じた(注1)。肥前国風土記の「篠原の村の弟日姫子」が、風土記のみで終わってしまい、万葉集からは、なぜ「松浦佐用姫」に変わってしまったのかといえば、筑紫歌壇における山上憶良と大伴旅人の深い精神的な交流があり、両者が、相手を意識しながら歌の贈答を繰り返した結果、「篠原」が「松浦県」さらには「松浦」へ、「弟日姫子」が「佐用姫」へと変えられた経緯が推測された。その過程で、「佐用姫」の「さよ」は、肥前国風土記の歌詞「さひとゆ（さひとよ）」が基になり、播磨国風土記の讃容郡の由来になった「五月夜」や「賛用都比売」とも関わることが推測された。また、領巾振り伝説に限定された理由は、「弟日姫子」伝説の持つ大蛇との怪婚譚的要素を省くと共に、伝説の主人公が、大伴旅人の先祖である大伴の狭手彦であることが大きく関わるとした。さらに悲劇的な男女の別れには、旅人と妻の別れや、旅人を引き留めたい憶良の気持ちも投影されていた。いずれにせよ、以後、松浦佐用姫伝説は、肥前国風土記の蛇婿入り譚ではなく、領巾振りに代表される男女の悲恋譚として、後世に受け継がれていくことになったと論じた。本稿では、それ以前の弟日姫子伝説の主題である蛇婿入り譚の側面に

ついて検討してみたい。まず、肥前国風土記の該当部分を掲載する(注2)。

鏡の渡。郡の北に在り。昔者、檜隈の廬入野の宮に御宇しめしし武少広国押楯の天皇のみ世、大伴の狭手彦の連を遣りて、任那の国を鎮め、兼ねて百済の国を救はしめたまひき。命を奉りて到り来、この村に至り、すなはち篠原の村の　篠をば志弩と謂ふ。弟日姫子を娉ひて婚を成しき。日下部の君等の祖なり。容貌美麗しく、特に人間に絶れたり。分別るる日、鏡を取りて婦に与へき。婦、悲しみの涕を含みて栗川を渡るに、与へられし鏡、緒絶えて川に沈みき。因りて鏡の渡と名づく。

褶振の峰。郡の東に在り。烽の処なり。名を褶振の烽と曰ふ。大伴の狭手彦の連、発船して任那へ渡る時に、弟日姫子、ここに登りて、褶を用ちて振り招きき。因りて褶振の峰と名づく。然して弟日姫子と狭手彦の連と相分れて五日経ちし後、人あり、夜毎に来て、婦と共に寝ね、暁に至れば早に帰る。容止形貌、狭手彦に似たり。婦、そを恠しと抱ひ、忍黙すること得ずて、窃かに続麻を用ちてその人の襴に繋け、麻の随に尋め往きて、この峰頭の沼の辺に到れば、寝たる蛇あり。身は人にして沼の底に沈み、頭は蛇にして沼の脣に臥す。忽ちに人と化為るすなはち語りて云ひしく、

篠原の　弟姫の子そ　さひとゆも　率寝てむしだや　家にくださむ

時に、弟日姫子の従女、走りて親族に告げしかば、親族衆を発して昇りて看るに、蛇と弟日姫子と並に亡せて存らず。ここに、その沼の底を見るに、但人の屍のみあり。各、弟日姫子の骨と謂て、すなはちこの峰の南に就きて、墓を造りて治め置きき。その墓見に在り。

ここでは、「弟日姫子と狭手彦の連と相分れて五日経ちし後、人あり、夜毎に来て、婦と共に寝ね、暁に至れば早に帰る。容止形貌、狭手彦に似たり。婦、そを恠しと抱ひ、忍黙すること得ずて、窃かに続麻を用ちてその人の襴に繋け、麻の随に尋め往きて、この峰頭の沼の辺に到れば、寝たる蛇あり。身は人にして沼の底に沈み、頭は蛇にして沼の脣に臥す。」とあり、乙女と大蛇の怪婚譚であることは明らかである。いわゆる三輪山伝説と同型である。三輪山伝説についても、既に拙稿でその趣旨を論じた(注3)。三輪山伝説は、次のようなものである(注4)。

ア、三輪山伝説について

①　古事記・中巻・三輪山（みわやま）伝説

此の意富多多泥古（おほたたねこ）と謂ふ人を、神の子と知れる所以は、上に云へる活玉依毘売（いくたまよりびめ）、其の容姿端正しかりき。是に壮夫有りて、其の形姿威儀、時に比無きが、夜半の時に倏忽到来つ。相感でて、共婚ひして共住る間に、未だ幾時もあらねば、其の美人妊身みぬ。爾に父母其の妊身みし事を恠しみて、其の女に問ひて曰ひけらく、「汝は自ら妊みぬ。夫无きに何由か妊身ぬる。」といへば、答へて曰ひけらく、麗美しき壮夫有りて、其の姓名も知らぬが、夕毎に到来て共住める間に、自然懐妊みぬ。」といひき。是を以ちて其

の父母、其の人を知らむと欲ひて、其の女に誨へて曰ひけらく、「赤土を床の前に散らし、閉蘇紡麻を針に貫きて、其の衣の襴に刺せ。」といひき。故、教の如くして旦時に見れば、針著けし麻は、戸の鉤穴より通りて出でて、唯遺れる麻麻は三勾（みわ）のみなりき。爾に即ち鉤穴より出でし状を知りて、糸の従に尋ね行けば、**美和山（みわやま）に至りて神の社に留まりき。**故、其の神の子とは知りぬ。故、**其の麻（を）の三勾遺（みわのこ）りしに因りて、其地を名づけて美和（みわ）と謂ふなり。**

三輪山伝説では、素性の知らない男性が乙女の許を毎夜訪れ、契りを結ぶ。不審に思った娘が両親の勧めで、男性の衣の裾に麻糸を付けると、朝になって、鍵穴を通り抜けて外へ続き、三輪山に到ったという話で、その男性が三輪山の神であることが判明したというよく知られた話である。

そして三輪山の神は、古来、蛇体であることが知られている。日本書紀には次のようにある(注5)。

② 日本書紀・第五・崇神天皇・三輪山伝説

是の後に、倭迹迹日百襲姫命（やまとととひももそびめのみこと）、**大物主神（おほものぬしのかみ）の妻と為る。**然れども、其の神常に昼は見えずして、夜のみ来ます。倭迹迹姫命（やまととびめのみこと）、夫に語りて曰く、「君、常に昼は見えたまはねば、分明に其の尊顔を視たてまつること得ず。願はくは暫留りたまへ。明旦に仰ぎて美麗しき威儀を観たてまつらむと欲ふ」といふ。大神対へて曰はく、「言理灼然なり。吾、明旦に汝が櫛笥に入て居む。願はくは吾が形にな驚きそ」とのたまふ。爰に倭迹迹姫命、心の裏に密に異しび、明くるを待ちて櫛笥を見れば、**遂に美麗（うるは）しき小蛇（こをろち）有り。**其の長さ大さ衣の紐の如し。則ち驚きて叫啼ぶ。時に大神、恥ぢて忽ちに人の形に化り、其の妻に謂りて曰はく、「汝、忍びずて吾に羞せつ。吾、還りて汝に羞せむ」とのたまふ。仍りて大虚を践みて御諸山に登ります。爰に、倭迹迹姫命、仰ぎ見て悔いて急居。則ち箸に陰を撞きて薨ります。乃ち大市に葬る。故、時人、其の墓を号けて箸墓と謂ふ。是の墓は、日は人作り、夜は神作る。

この日本書紀の記述では、三輪山（御諸山）の神は、「**美麗しき小蛇**」と明記されている。三輪山の神は、間違いなく蛇神と言える。この記述から、三輪山の神は、小さな蛇であるという意見も出て来よう。確かに、この用例では小さな蛇として現れているが、常に小さい蛇の姿である訳ではなかろう。それは、次の瞬間に、この蛇が通常の人の姿になっていることからも分かることである。実際、倭迹迹日百襲姫の夫としての大物主神は、姫と逢っている時は、人間の大きさであったはずだからである。つまり、大物主神は、姿かたち大きさを自由に変えられる神であって、小さな蛇の姿は、そうした変化の姿の一つに過ぎないのではないか。即ち、この場面では、倭迹迹日百襲姫に、大物主神が蛇神であることが分かってもらえれば良いので、櫛笥に入る大きさになっていたに過ぎないという理解が可能であろう。

イ、三輪山と大物主に関する描写について

さて、その蛇神としての三輪山の神は、大物主として、次のように描かれる。

①　古事記・上巻・御諸山の上に坐す神

是に大国主神、愁ひて告りたまひしく、「吾独して何にか能く此の国を得作らむ。孰れの神と吾と、能く此の国を相作らむや。」とのりたまひき。是の時に**海を光して依り来る神**ありき。其の神の言りたまひしく、「能く我が前を治めば、**吾能く共与に相作り成さむ。若し然らずば国成り難けむ。**」とのりたまひき。爾に大国主神曰ししく、「しからば治め奉る状は奈何にぞ。」とまをしたまへば、「**吾をば倭の青垣の東の山の上に伊都岐奉（いつきまつ）れ。**」と答へ言りたまひき。**此は御諸山（みもろやま）の上（へ）に坐（ま）す神なり。**

②　日本書紀、神代上・第八段・一書第六

「今し此の国を理むるは唯吾一身のみなり。其れ吾と共に天下を理むべき者、蓋し有りや」とのたまふ。**時に、神しき光海を照し、忽然に浮び来る者有り。曰く、「如し吾在らずは、汝何ぞ能く此の国を平けむや。吾が在るに出りての故に、汝其の大き造る績を建つること得たり」といふ。**是の時に大己貴神（おほなむちのかみ）問ひて曰く、「然らば汝は是誰ぞ」とのたまふ。**対へて曰く、「吾は是汝が幸魂（さきみたま）・奇魂（くしみたま）なり」といふ。**大己貴神の曰く、「唯然なり。廼ち知りぬ、汝は是吾が幸魂・奇魂なりといふことを。今し何処にか住らむと欲ふ」とのたまふ。**対へて曰く、「吾は日本国（やまとのくに）の三諸山（みもろやま）に住らむと欲ふ」といふ。故、即ち宮を彼処に営り、就きて居しまさしむ。此大三輪（おほみわ）の神なり。**

即ちこの三諸山（大三輪）の神は、「海を光して依り来る神」（古事記）であり、「神しき光海を照し、忽然に浮び来る者」（日本書紀）として描かれる。「海を光」すのは「肥長比売」と同様で、蛇身の神である証拠であろう。肥長比売の話は、古事記・中巻・垂仁天皇の条で、本牟智和気王の話として出て来る。

③　爾に其の御子、一宿肥長比売と婚ひしたまひき。故、竊かに其の美人を伺たまへば、蛇なりき。即ち見畏みて遁逃げたまひき。爾に肥長比売患ひて、**海原を光して**船より追ひ来りき。故、益見畏みて、山の多和より御船を引き越して逃げ上り行でましき。

右の肥長比売の話では、姫は蛇であり、「海原を光して」船で御子を追跡する。これはまさに、「御諸山の上に坐す神」である「三輪山の神」が、「海を光して依り来る神」「神（あや）しき光（ひかり）海（うみ）を照し、忽然（たちまち）に浮び来る者」であることと軌を一にするものであろう。蛇の神は、海(海原)を光してやってくる神として描かれるのである。

このように、三輪山の神は、蛇の神である。そして、その三輪山は、古くから、その山体自体がご神体であるとされてきた。三輪山

が蛇神であることと、山体自体がご神体であることは如何に関わるのか。以下、考察したい。

ウ、三輪山の名義と三輪山の神の関係について

そもそも三輪山が「みわやま」と呼ばれるのはなぜか。従来、「古事記の三輪山伝説で、麻（を）が三勾（みわ）残ったとされるところから」（古事記内部の地名起源説話）とか、「『みわ』とは酒を入れる容器の名称で、蛇神を迎えるため」とか言われてきた。

しかしながら、筆者は次のように考えたい。先ず、「三輪山」は、通常、次のように表記される。

① 万葉集の「三輪（みわ）」の表記　三和（みわ）（山（やま））・三輪（みわ）（山）・神酒（みわ）・神（みわ）・綜麻山（みわやま）

② 古事記の「三輪（みわ）」の表記　美和（みわ）

即ち、三輪山の「み」は上代特殊仮名遣いで、甲類の「み」である。

ところで、今、問題になっている「蛇」であるが、仏足石歌につぎのような歌がある（注6）。

仏足石歌　十九番　**与都乃閇美（よつのへみ）**　伊都々乃毛乃々（いつつのものの）　阿都麻礼流（あつまれる）　伎多奈伎微乎婆（きたなきみをば）　伊止比須都閇志（いとひすつべし）　波奈礼須都倍志（はなれすつべし）**（四（よ）つの蛇（へみ））**　五（いつ）つの鬼（もの）の　集（あつ）まれる穢き身をば　厭ひ捨つべし　離れ捨つべし）

「巳（み）」は、通常「へみ」の省略形と理解されているが（日本釈名、和訓栞、大言海等）、右の仏足石歌の「へみ」の用例からは、「巳（み）」は、明らかに甲類の「み」である。即ち、蛇を表わす「巳（み）」は、上代特殊仮名遣いでも、「三輪山（みわやま）」の『三（み）』や、「美和山（みわやま）」の『美（み）』と同じ甲類と判断される。従って、三輪山（美和山）の「み（三・美）は、「み（巳）」即ち、「蛇（み）」の意ではないかという推測が可能である。つまり、音韻面でも、「巳輪（みわ）」という語源論が成り立つのでないか。

ということは、次の推定が可能であろう。

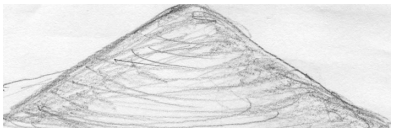
ア、「三輪山」の「三輪（みわ）」とは、「巳輪（みわ）」の意で、「蛇（へび）の輪（わ）」、つまり蛇がとぐろを巻いている様子を表わすものと考えられるのでないか。

イ、三輪山が古来、その山体自体がご神体である神体山であると云われてきたのも、三輪山の神は蛇神であることから、蛇の姿そのものを表わしていると考えるのが無理がない。

ウ、三輪山は円錐形をしているが、蛇はとぐろを巻けば、まさに円錐形となる。

エ、結局、「三輪山（みわやま）」の名義は、その円錐形の山体を蛇がとぐろを巻いた形に見たて、「蛇＝巳（み）」の「輪（わ）」と呼称したところから起こったものと推論できるのではないか。

図で描けば、次のようになろう。（上、三輪山の神である蛇がとぐろを巻いたところ。下、三輪山模式図）



実は、この三輪山が蛇のとぐろを巻いた姿の山ではないかという着想は十数年前に得たものであるが、それよりもはるか以前に吉野裕子氏は、そのことを指摘されていたのであった(注7)。

奈良・三輪の地には、古来、明神の巳さんが三輪山を七巻半している、という伝承があるが、それはつまり、三輪の山容にトグロを巻く蛇を連想していた証拠である。

ただ、吉野氏は、三輪山の語源を「三つの輪の山」とされ、蛇が三重にとぐろを巻いている形とされたが、筆者は、「三」は「巳」であることを隠すための表記で「巳」に実質的な意味があると判断し、「巳輪（みわ）」即ち「蛇（へび）の輪（わ）」の意で、蛇がとぐろを巻いている様子を表わすと考えるので、その点は異なる。

一方、中川ゆかり氏は、「蛇体で現れるのは〝みもろ山〟の神で、……神氏の祭る美和山の神について、新たにその起源を語ろうとする時、前の段階の信仰における神の姿である蛇体を持ち出す必要があったとは思えない。」とされ、川上順子氏も、「三輪山の神は、大和の国つ神の統領として、大物主神という神名が付与されると同時に、『古事記』のなかでは蛇の姿は隠されているのである。」とされている(注8)。ご指摘の通りであるが、筆者は、これらの指摘に対しては、次のように考える。即ち、「三輪（みわ）」が「巳輪（みわ）」の意味であることが当時の人々にとって周知のことであっても、三輪山の場合、山自体がご神体であるという特殊な事情が存在する。どの神社においても、ご神体が如何なるものかは秘匿されるのが普通である。従って、誰もが、三輪山のご神体は蛇であることは熟知していても、ご神体を公然と明記することは憚られたのである。その結果、「巳輪（みわ）」は、「三輪」「美和」「三勾」など、「巳輪」を示さない表記でむしろ、綴られたのであり、「御諸山」という呼称も、「ミワ山」という呼称が「巳輪山」を連想させるために、意図的に「三輪（美和）山」等の表記を避け、「御諸山」の表記を使用したのでなかろうか。

エ、弟日姫子伝説と三輪山伝説の構造的類似性について

このことと、弟日姫子の伝説は深く結びついている。まず説話の構造がよく似ている。乙女の許に夜見知らぬ男性が訪れ契りを結ぶという点は全く共通している。ただ敢えて違いを言えば、肥前国風土記では、乙女である弟日姫子は、愛する大伴狭手彦が船に乗って新羅に向かって去ってしまった寂しさから来る心の空虚を満たすために、狭手彦と姿形が似ていた見知らぬ男性（実は領巾振り山即ち

鏡山の主である大蛇）に身を任せてしまう。その点では、女性の微妙な心理が描かれている点で、肥前国風土記の方が古事記の三輪山伝説よりも、より文学的だということも可能である。しかしながら、説話の基本的な構造は同じであり、男性の素性を確かめる為に女性が男性の衣服に麻糸を付け、その麻糸を辿ることで、男の素性を知る点も全く同じである。そして、その男性の正体が大蛇であることを肥前国風土記は「窃かに続麻を用ちてその人の襴に繋け、麻の随に尋め往きて、この峰頭の沼の辺に到れば、寝たる蛇あり。身は人にして沼の底に沈み、頭は蛇にして沼の脣に臥す。」と描く。三輪山伝説と同じ乙女と大蛇の怪婚譚であることは明らかである。三輪山伝説に於いては、上述のように、三輪山自体が三輪山の神であり、蛇身そのものであった。それは蛇がとぐろを巻いて円錐形の山体を成していた。一方、肥前国風土記では、「この峰頭の沼の辺に到れば、寝たる蛇あり。身は人にして沼の底に沈み、頭は蛇にして沼の脣に臥す。」とあって、領巾振り山即ち鏡山の池に住む池の主といった趣である。池に大蛇が住むという伝承は、京都の深泥が池の伝説など、各地に見いだすことができる。ここも、そうした見方が可能であるが、三輪山伝説との関わりから言えば、この領巾振り山即ち鏡山自体が、三輪山同様に蛇身を表わすという見方も可能であると考える。

この点についても、既に吉野裕子氏が指摘されていることであるが、鏡山の「かがみ」は蛇を表わす古語であるとする主張である。蛇の中に「山かがし」という名称を持ったものがあり、その「かが」は、「蛇」の古名とする。また、酸漿（ほおずき）の古語の「山かがち」も、「かが」は蛇の意味で、酸漿（ほおずき）はその袋の形が蛇の頭部に似ているからだという。さらに、お正月の鏡餅も、「かがみ」は鏡と共に蛇を意味する言葉で、鏡餅を重ねて、大きな餅の上に小さな餅を乗せて、全体として円錐形を成すのは、蛇がとぐろを巻いている形を表すのだという。どの説も基本的に首肯できると考える。この考えに基づけば、領巾振り山即ち鏡山も、蛇身そのものを表すと考えれよう。三輪山とは違って山頂まで続く円錐形ではなく、横から見れば台形に見える半円錐形である。蛇がとぐろを巻く場合、横から見てピラミッド型となる場合がすぐに連想されるが、実際に蛇がとぐろを巻く場合、横から見て台形となる場合も少なくない。それ故、領巾振り山即ち鏡山は、半円錐形で蛇のとぐろを表わすものであったと見なせると考える。

オ、褶（比礼）振りと蛇の関係について

また、別の見方もできる。古事記上巻で、大穴牟遅神が根堅洲国へ行ったときに、須勢理毘売が、夫の大穴牟遅神に「蛇の比礼」を授ける場面がある。

> 即ち喚び入れて、其の蛇の室に寝しめたまひき。是に其の妻須勢理毘売命、蛇の比礼を夫に授けて云りたまひしく、「其の蛇咋はむとせば、此の比礼を三たび挙りて打ち撥ひたまへ」とのりたまひき。故、教の如せしかば、蛇自ら静まりき。

ここでは、比礼を三度振ることで、蛇をおとなしくさせている。すなわち、比礼を振る行為には、蛇を制御できる呪的能力が備わっていることになる。つまり、弟日姫子が領巾振山で領巾を振ったこ

とが、領巾振山の池の主である大蛇を動かしてしまったとも解釈できるのである。

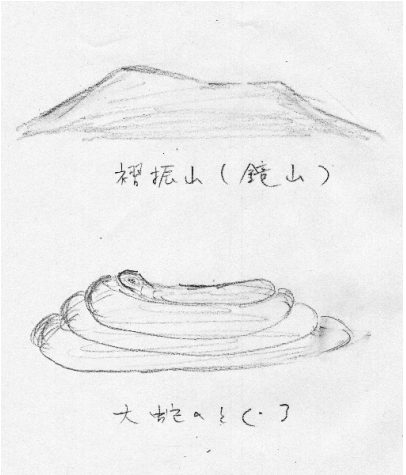
カ、始祖伝説の面での共通性について

別の視点から、弟日姫子の伝説を考えてみたい。伝説の冒頭部には、次のようにある。

鏡の渡。郡の北に在り。昔者、檜隈の廬入野の宮に御宇しめしし武少広国押楯の天皇のみ世、大伴の狭手彦の連を遣りて、任那の国を鎮め、兼ねて百済の国を救はしめたまひき。命を奉りて到り来、この村に至り、すなはち篠原の村の　篠をば志弩と謂ふ。弟日姫子を娉ひて婚を成しき。日下部の君等の祖なり。容貌美麗しく、特に人間に絶れたり。

即ち、右の冒頭部では、「篠原の村の弟日姫子」は、「日下部の君等の祖」とされている。ここで問題なのは、なぜ「弟日姫子」が「日下部の君等の祖」とされるのか、その理由についてである。なぜならば、弟日姫子は、大伴の狭手彦が新羅へ向かって去った後、五日後に現れた狭手彦とよく似た男と契ってしまい、その後、麻糸を辿った結果、相手の男性が蛇だと分かった訳で、その蛇に命を取られたことは明らかである。つまり、弟日姫子が大伴の狭手彦の子を宿していたとしても、子供の誕生前に命を失っていれば、子孫はいないはずだからである。それなのに、弟日姫子が「日下部の君等の祖」とされたのはどうしてか。一つの考えとして、次のような想定ができるのではなかろうか（注9）。

弟日姫子が大伴の狭手彦と出逢い契りを交わしてから、すぐに狭手彦が新羅へ出かけたのではなく、一年余りは余裕があった。その間に二人の間に子供が生まれた。その場合、弟日姫子は、まさしく「日下部の君等の祖」に相当した。子孫が生まれた後では、弟日姫子が命を失っても、子孫が残ることになったと考えれば、なんら問題は無いことになる。そして、このことは、弟日姫子の伝説と三輪山伝説との深い関係を示唆する。そもそも、三輪山伝説では、「此の意富多多泥古（おほたたねこ）と謂ふ人を、神の子と知れる所以は、上に云へる活玉依毘売（いくたまよりびめ）、其の容姿端正しかりき。」とあって、「意富多多泥古（おほたたねこ）と謂ふ人を、神の子と知れる所以」を述べた文章であって、始祖伝説という点でも両者の共通性が出てくるからである。



鏡山〈領巾振り山〉

キ、まとめ

以上、弟日姫子の伝説は、説話の構造からいっても、三輪山伝説と極めてよく似た伝説であると言える。蛇婿入り譚であり、円錐形、あるいは半円錐形の山を蛇のとぐろを巻いた状態と見なしたものであり、始祖伝説でもある。蛇はその土地を支配する古い国土創世に関わる神でもあったと考えられる。弟日姫子は、そうした古い国土の神に対する人身御供的存在と言えよう。

二、周賀の郷の艫舳の牂戕について

周賀の郷には、次のようにある。

周賀の郷。郡の西南に在り。昔者、気長足姫の尊、新羅を征伐たむと欲ほして、行幸しし時に、御船この郷の東北の海に繫ぎしに、艫舳の牂戕、礒と化為りき。高さ廿丈余り、周り十丈余り、相去ること十町余りなり。充くして嵯峨しく、草木生ひず。

この「艫舳の牂戕、礒と化為りき」について、岩波大系本『風土記』では頭注三で次のように述べる。「岩石。礒は水中または水辺の岩石。海中から突き出ている岩についての縁起譚。長崎港口の小島、またはその北方の外海村沖の大角力・小角力の岩礁に擬する説があるが郡の東北としている方位にあわない。郡の東北にあたる海は大村湾の南西隅で、後藤説は二つの礒を時津港の北方の黒島・二島に擬している。従うべきか。」

また、新古典文学全集『風土記』は、頭注十一で、「東北」に誤写がなければ、大村湾であろう。ただ、島の数が多いのでこの伝承の地は特定できない。『考証』『大系』は時津港の北方の黒島・二島かという。」

以上を整理すると、「艫舳の牂戕、礒と化為りき」については、次の諸説があることになる。

①長崎港口の小島
②長崎市外海沖の大角力・小角力の岩礁
③大村湾の南西隅にある時津港北方の黒島・二島
④その他特定できない

ここで問題になるのは、その位置であろう。まず、「周賀の郷。郡の西南に在り。」とあるので、「周賀の郷」の位置は、現在の西彼杵郡の位置にあったとみて誤らないであろう。つぎに「東北の海」とあるのがどこを指すのかが難しい。方位が正しければ、大村湾を指すとみるのは確かに自然で、③の説が正しい事になろう。しかし、仮に野母崎半島の方に「周賀の郷」があるならば、東北の海とは、現在の長崎港あたりでもおかしくないので、①の説も成り立つ。『長崎県の地名』では、「周賀郷」について、次のように述べている(注10)。

またスカが諸国の地名の例から砂地を意味するとすれば、大村湾沿いの砂浜の広がる地域が想定される。比定地を現大瀬戸町雪浦を含む一帯とする説(「大日本地名辞書」など)、西海町の巣喰浦とする見解(佐世保市史)、野母崎町とするものがある(長崎県史)。

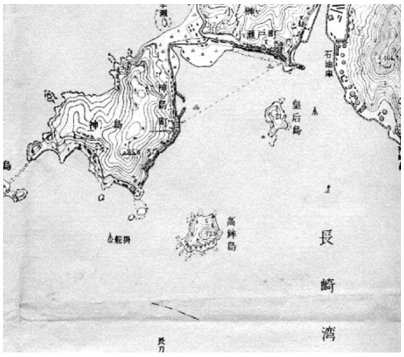
右に拠れば、野母崎半島は、砂州の地形として、相応しい面を有すると思われる。また、「東北の海」が誤りで、「西北の海」が正し

ければ、①②の説が正しいことになろう。

太宰管内志では、次のように記す(注11)。

さて「柳園随筆」彼杵郡松島ノ迫門を出て長崎に至る洋中を相撲灘と云う神島まで十里あり其沖のかなたに十余丈の大岩二ッ海中に立チたり是を沖ノ相撲・地ノ相撲と云其状甚奇なり沖ノ方なるは大洞ありて見えたり南北相大して屹立たる状勇猛の力を争う勢に似たり因て俗に相撲石といふ此巌の辺の深さ三十ひろありといふ此地ノ方は雪ノ浦幸の浦な土有り　風土記　に周賀ノ郷は此辺の事なるべし幸ノ浦と云も由ありげに聞ゆ神功皇后の牂柯化して石と成れりと云は此の相撲石ノ事なるべし郡の西南とあるもよくかなへり

とある。、そこで、これら先行文献でも言及された点を検証するために、地形図や写真を使って検証してみたい。



左　高鉾島　中央　皇后島〈現在は陸地に繋がっている〉
右　女神大橋

そこで実際の島や岩礁の形状や二つの島の間の距離が、風土記の描写に合っているかどうかを確かめたい。この礒は、「高さ廿丈余り、周り十丈余り、相去ること十町余りなり。充くして嵯峨しく、草木生ひず。」とされる。どこまでが実際の地形を判定しているかは難しい面があるが、まずは、「高さ廿丈余り」とは、「一丈が約三メートル」として、「高さ六十メートル余り」、「周り十丈余り」は、「周囲が約三十メートル余り」、「相去ること十町余りなり」は、「一町」を「約百八メートル」として、「二つの島の間の距離が一千八〇メートル余り」であるという意味になろう。

そこで、上記の諸説について地形図を使って確認すると、次のようになる(注12)。具体的には、高さは地形図の実測数値を使い、周囲については、地形図上で、島の輪郭に糸を置き、その糸の長さを二五〇倍して推定の距離を出した。二島の間の距離は、地形図の両島の最短距離を物差しで測り、二五〇倍して求めた。

①長崎港口の小島。これは、皇后島・高鉾島のことと考えると、次のようになる。

皇后島　高さ二十一・〇メートル。周囲　約六五〇メートル。
高鉾島　高さ七二・九メートル　周囲　約七五〇メートル
二島の距離　約五七五メートル。
形状　ピラミッド型
草木の状態　樹木が鬱蒼と茂っている。

②長崎市外海沖の大角力・小角力の岩礁

大角力　高さ七六・五メートル。周囲　約二七五メートル。

小角力　高さ五二・八メートル。周囲　約二五〇メートル。
二島の距離　約二七五〇メートル。
形状　険しくそそり立っている
草木の状態　岩礁であって、草木は繁茂していない

③大村湾の南西隅にある時津港北方の黒島・二島
黒島　高さ三四メートル。周囲　約七五〇メートル。
二島　高さ二一メートル。周囲　約一二〇〇メートル。
二島の距離　約一五七五メートル
形状　扁平な饅頭型
草木の状態　草木が繁茂している

まず、③の説についてだが、岩波大系本は、方位が正しくないからと、後藤説に従い、二つの礒を時津港の北方の黒島・二島に擬しているが、この二つの島は、扁平な島であり、高さもとても足りないし、「充くして嵯峨しく、草木生ひず。」という描写と全く合わないのである。この二島が該当することはあり得ないと考える。また神功皇后伝説から考えても、そもそも新羅遠征に出かけるときに、大村湾という内海から出発するという構想自体が不自然すぎると考える。歴史的に見ても、韓国や中国との交通は外海を出発点としており、この説はそうした常識からも外れるのでなかろうか。

次に、①の説は、その一つが皇后島（こうごじま）という名称を持ち、神功皇后伝説を背景として命名されたと思われる点は注目される。しかし、いつからその名称があるかが明確でなく、当該の風土記の記事を基に、好事家が新たに付けた物で、それほど古くない可能性もある。問題点としては、この島は高さが低すぎて風土記の記述とは合わず、また、その島の形状もピラミッド型で「充くして嵯峨しく」という風土記の描写と合わないし、現在樹木が生い茂り、「草木生ひず。」という描写とも一致しない。また、島の周囲は六〇〇メートルを超え、周囲三十メートルとある風土記の記述と大きく隔たる。風土記の「周り」がどういう経緯で数値化されたかは不明で、実測の可能性は薄く、遠方からの推計であろうが、それにしても差が大きすぎる気はする。

一方、対として出てくる高鉾島は、高さは七〇メートルを超え、風土記の記述と一致するが、島の周囲は七〇〇メートルを超えてしまい、風土記の三〇メートルと違いが大きすぎる。形状も円錐型で樹木が繁茂しており、風土記の記述とは全く合わない。

さらに、両島の距離は五〇〇メートル強であって、風土記の記述の半分しかない。

これらを総合的に考えると、当該の長崎湾入り口の二島が該当する可能性は低いと言うべきだろう。

左　黒島　右　二島〈島が二つあるように見えるが繋がった一つの島〉

二島と黒島

②の大角力・小角力の岩礁は、文字通りの岩礁で、大角力は、高さ七六・五メートル。小角力は高さ五二・八メートルで、風土記の「高さ廿丈余り」即ち六〇メートル以上という記述にほぼ一致する。ただ、周囲は、それぞれ約二七五メートル・約二五〇メートルあっって、「高さ廿丈余り」即ち周囲三〇メートル余りという記述とはかなりのずれがある。しかし、①や③の説が、はるかに大きなずれを有したことに比べれば、相対的にずれは小さい。問題は二島の距離であって、約二七五〇メートルというのは、「相去ること十町余りなり」即ち、「二つの島の間の距離が一千八〇メートル余り」であるという風土記の記述と大きくずれている。これも「周り」の距離の問題と同じで、実測したとは到底考えられないから、西彼杵半島の海岸付近から二島を遠望し、だいたい十町ばかりは離れていると推測して記述した物であろう。ただ、それが実際は、ほぼ倍の長さあったということで説明できるのではないか。また、形状の面から言っても、岩肌には草木も生えておらず、「充くして嵯峨しく、草木生ひず。」という表現にもぴったり合う。

方位こそ問題は残るが、この伝承は、②長崎市外海沖の大角力・小角力の岩礁と見なすべきと考える。実際、この岩礁を遠望する時、古代人の想像力がこの伝承をもたらしたことを実感できるのである。さらに、神功皇后伝伝説との関係で言っても、近くに「神ノ浦」という神功皇后が立ち寄ったという伝説の土地があり、こうした伝説が生まれやすい環境も整っていると思われる。

なお、この大角力・小角力の岩礁については、次のような昔話が地元で語り伝えられてきた。ふたつの岩礁を兄弟と見るのは、神功皇后伝説で、船を繋ぐ二つの牂戕との関係を想像しやすい。また、兄弟の島のうち兄にあたる大角力は、岩の中央に大きな穴が開いており、船と綱で繋ぐとしたら、綱を通すにふさわしい穴が開いており、そうした伝説が生まれたというのも納得ができるのである(注13)。

左　小角島　右　大角島　其の右　母子島

兄弟島

外海町の沖合にある角力灘に、島の真ん中に穴があき、帆をかけ舟もそのまま通り抜けられる一見奇抜な島がある。穴があいているので、普通ほんげえ島ともいう。別名、兄弟島また、相撲をとっている形をした大きな島と小さい島があるその大きい方で大角力ともいう。

昔、ある漁師の父親が魚とミカンを交換して帰り、兄弟二人に一つずつそのミカンを与えた。兄弟は自分の小さい片方は大きいで、うばい合いになってケンカをしたので、父親は非常に

怒って弟のは肩を、兄のは腹を切って二人を縛り、海に放り投げた。（出津では川から流したという）それが岩になって、今日、兄弟岩と呼ばれるようになった。言い伝えでは、島の頂上には今もミカンの木があるという。肩を切られた形をした左側が弟で、腹をえぐり取られた形をした右側の高い方が兄であるという。兄弟げんかをする子どもたちの教訓の島として、眺められ語り継がれている。（外海町史より）

三、速来の門について

速来の門がどこかということも大きな問題である。原文は次のようにある。

速来門。在郡西北。此門之潮之来者、東潮落者、西湧登。湧響同雷音。因曰速来門。又有抜木。本者著地、末者沈海。海藻早生以擬貢上。

現在の注釈書では、次のように読んでいる。たとえば、新編日本古典文学全集では、以下の通りである。

速来の門。郡の西北のかたに在り。この門の潮の来るは、東に潮落つれば、西に湧き登る。湧く響は雷の音に同じ。因りて速来の門と曰ふ。又、抜れる木あり。本は地に著き、末は海に沈めり。海藻早に生ふを以ちて貢上に擬つ。

また、現代語訳は、次の通りである。

速来（はやき）の門。〔郡（こおり）の役所の西北にある〕この海峡において潮の来る状況は、東に潮が流れ去れば、西に湧き登るようなすさまじい勢いで潮が動く。湧く音響は雷の音と変わらない。これによって速来の門という。なお、ここにはさかんに繁（しげ）った木がある。木の根元は地面に付いているが、枝の先は海に沈んでいる。海藻（の）がほかよりも早く生長する。それで朝廷への献上品にあてている。

そもそも此の訓読と現代語訳は正しいであろうか。頭注では「干満の差で、急激に潮が流れ去る。」「去った潮を埋めるために、噴き出すように流れ込む」と説明する。しかしながら、潮の流れが急なのは干満の差のためではない。大きな外洋から狭い海峡に入り込むため、細い通路を通ろうとして流れる勢いが増すためである。それは、ホースで水を撒くときに、ホースの出口を細くすれば、勢いが増して、より遠くへ水が届くのと同じ原理である。

三間十郎氏が指摘されるように、「東に潮が流れ去れば、西に湧き登る」というのは、少し考えてみるとおかしいのではないか。東に水が流れてしまい、其の空白を埋めるように西から水が湧いてくると云うような解釈をしている。しかし、東に水が流れ去ることと西から水が湧いてくることは因果関係にある訳ではない。東の流れとは関係なく絶えず西からは浪のうねりと共に新たな潮が流れてくるのだ。また、本文は「東に潮落つれば」だから、単に「流れ去る」というのはおかしい。「落」は「上から下に、高い所から低い所にくだる」意味である（大漢語林）。勿論、これは、速来の門の位置が標高が高い丘状の地形であり、潮は丘の東側に落ち、丘の西からは新たな潮が登ってくるという三角形の地形だという意味ではない。「速来の門」が狭いから、広い外洋の海水が集まってきて盛り上がるという意味で、そこから流れる海水を「落ちる」と表現したのであろう。従って、

此門之潮之来者、東潮落者、西湧登。湧響同雷音。因曰速来門。

は、「この門の潮の来るは、東より潮落つれば、西より湧き登る。

湧く響は雷の音に同じ。因りて速来の門と曰ふ。」と読むべきでないか。現代語訳は、「この海峡に潮がやって来ると（狭さで盛り上がるが、やがてそれ以上進めなくなると）、この潮が盛り上がった頂点から、一方は東の大村湾の方へ勢いよくながれ、又一方は、西の外洋に向かって潮が押し戻され、西から新たな潮が湧き登ってきたのとぶつかる。東から戻ってくる潮と新たに登っていく西の潮がぶつかって沸き上がり立てる音は、まるで雷の音と同じですさまじい音である。これによって速来の門という。」

こうした解釈であれば、「落ちる」や「登る」が何故使われているかも理解できよう。

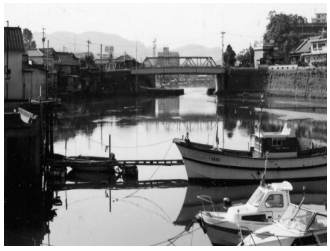
さて、この本文の問題点は二箇所ある。第一は、「速来の門」が現在のどこに当たるかという問題。第二は、「海藻早に生ふを以ちて貢上に擬つ」というのは、どういう意味かという問題である。

第一の点であるが、比定地は二か所ある。一つ目は、佐世保市の早岐という説である。二つ目は、針尾の瀬戸である。一つ目は、「速来の門」の「速来」は「はやき」と読むが、これが「早岐（はいき）」に変わったのだとする説である。「はやき」から「はいき」は音韻的に無理がないし、場所的には大村湾に海水が入り込む点で、現在でもその痕跡をみいだすことは可能である。痕跡という表現を使ったのは、改修工事で、現在の「早岐（はいき）」では、本文にあるような「この門の潮の来るは、東より潮落つれば、西より湧き登る。湧く響は雷の音に同じ。」といった潮流を見出すことは難しくなっているからである。しかしながら、風土記の記述をよく考えると、海峡の幅が狭いが為に急流が発生し、さらに、狭すぎて東から押し戻される潮の流れと新たに西からやってくる潮の流れがぶつかって、水を湧き上げて、雷のような音を立てるというなら、むしろ、早岐のように狭い場所の方が相応しいということも言えよう。

この点に関して、三間十郎氏は次のように述べている(注14)。

さて往古大村湾を扼する針尾島はそれ自体が今、伊の浦瀬戸にみられる同瀬戸中の弁天島のようなものであった。今から二百数十年前の模様をしるした、正保四年（一六四七）平戸藩作製の「肥前国平戸領絵図」によれば「早岐瀬戸」で、当時三島は海中にある中の島であり、早岐のところは巾十七間（約三十米）。そこに横瀬がすわって「満汐ニカクル」と記されている。風土記が書かれた頃、即ち千二・三百年前頃の当時を想像するならば、早岐の瀬戸というのは現在みられる水路のようなちゃちなものではなかった筈である。その呑吐する勢たるや伊の浦瀬戸にも匹敵する程のものがあったに相違ないかと思われる。

確かに右のように考えることは可能であろう。特に地名の継承という点では、最も有力な説であることは否定できない。次に、現在の様子を観潮橋の付近で示す。



このように、昔の面影は、あまりないが、可能性は最も高い。

第二の針尾の瀬戸は、日本三大急流の一つとされる。もっとも狭い所は巾一七〇メートルで、「肥前国平戸領絵図」から推定される「早岐瀬戸」の最大の巾十七間（約三十米）に比べると遙かに幅が広い。これだと幅が広すぎて、「この門の潮の来るは、東より潮落つれば」という状況は起こりにくいであろう。つまり、海水の流れは盛り上がることなく、そのまま東の大村湾に向かって入り込んで行くからである。実際流れを見ても、「西より湧き登る。」と言った感じではない。「湧く響は雷の音に同じ。」という点は実際、潮の流れは聞こえるので、あり得ないことではない。さらに、「抜れる木あり。本は地に著き、末は海に沈めり。」といった情景も、実際に岸辺近くに樹木が沢山生い茂っており、いかにも、その枝が海水に浸ってもおかしくない場所にある。またさらに、もう一つ、針生の瀬戸に有利な事実がある。それは、海藻が早く成長するという事実である。

針尾の瀬戸と西海橋

そこで、次に「海藻早に生ふを以ちて貢上に擬つ」というのは、どういう意味か考察したい。岩波大系本の頭注一四では、「生育の季が早く珍しい。暖地の故か。」とする。しかし、これは正しくない。暖地ならどこでもよいことになり、この地である必然性はない。じつは、この針尾の瀬戸が急流であることが海藻の生育に大きくかかわるのだ。ＮＨＫのニュースで報道していたが、針尾の瀬戸が急流で海水の流れが速いことが海藻の成長を促し、針尾の瀬戸では、大きく立派な海藻が収穫できるのだという(注15)。そうした素晴らしい産物であるからこそ貢物として選ばれたのであろう。つまり、針尾の瀬戸では現在でも、その早い海水の流れで成長の早い良い海藻が採れるのであり、針尾の瀬戸が、その意味でも風土記の記述と一致していることは注目に値するのである。ただ、海水の流れが速いという条件さえあれば、早岐でも当然、海藻の生育は速かったはずであるから、このことが早岐説を否定するものではない。

以上の考察から、「針尾の瀬戸」の可能性も残されるが、地名の継承や、風土記の描写から、佐世保市「早岐瀬戸」が「速来の門」である可能性がより高いと言えよう。

結び

以上、肥前国風土記の解釈上の問題について触れてきた。なお、「高来郡土歯池」については、紙幅の関係で別稿で考察したい。

注

（1）拙稿「松浦佐世姫伝説に関する一考察―篠原の弟日姫子から松浦佐世姫へなぜ変わったか―」（『国語と教育』四十一号。平成二十八年十一月二十六日）

（2）風土記の本文引用は、小学館新古典文学全集『風土記』（植垣節也校注）による。

（3）拙稿「三輪山伝説の起源を探る」平成二十六年十二月『神話・象徴・儀礼』（篠田知和基、楽瑯書院）

（4）古事記の引用は、岩波大系本『古事記・祝詞』（倉野憲司・武田祐吉校注、一九五八年六月）に拠る。

（5）日本書紀の引用は、岩波大系本『日本書紀上』（坂本太郎等校注、一九六七年）に拠る。

（6）祝詞の引用は、岩波大系本『古事記・祝詞』（倉野憲司・武田祐吉校注、一九五八年六月）に拠る。

（7）吉野裕子『蛇　日本の蛇信仰』法政大学出版局、ものと人間の文化史、一九七八年二月）に拠る。

（8）中川ゆかり「鈎穴を通る神―古事記の三輪山神話―」（『古事記年報』三十八号、平成八年一月）、川上順子『古事記と女性祭祀伝承』所収「三輪山神話考」平成七年六月、高科書店）

（9）谷口雅博氏は、当該の始祖注記は、狭手彦に関わっている可能性があるとされ、「容貌美麗」「特絶人間」も、狭手彦を指すとされる（『肥前国風土記』弟日姫子説話考―異類婚姻譚と歌―、『國學院雑誌』一一五巻第十号、二〇一四年）興味深い研究であるが、ここは挿入句的に弟日姫子の説明をしている部分なので、文脈的にやや無理があると思われる。

（10）『長崎県の地名』（日本歴史地名大系三巻、二〇〇一年十月）に拠る。

（11）『太宰管内志　下』（日本歴史地理学会、明治四三年五月）の復刻版（平成元年九月、文献出版）に拠る。

（12）地形図は国土地理院の二万五千分の一のものによる。使用したものは、それぞれ次の通りである。

三二頁　皇后島と高鉾島（長崎四号長崎の四「長崎南西部」昭和二九年修正測量）

三三頁　二島と黒島（長崎三号―四「長浦」平成二年修正測量）

三四頁　小角力と大角力（長崎七号神浦の二「神浦」昭和二九年修正測量）

同僚の大平晃久先生には、資料の貸し出し等や地理的情報に関するアドバイスで大変お世話になった。厚く感謝申し上げる。

（13）『外海町誌』（長崎県外海町、一九七四年）に拠る。

（14）三間十郎『佐世保版風土記抄』芸文堂、昭和四十六年十一月）

（15）公益財団法人 海洋生物環境研究所のホームページに拠れば、「水流と海藻類の成長」について、「水温に水流、栄養塩の条件を加え現場に近い環境状態を反映できる試験装置を製作し、海藻類に関する試験を行いました。ナラワスサビノリの

栽培試験の結果から、水温は藻体の生理代謝速度に関係し、水流は藻体をとりまく栄養条件に関係すると考えられ、それぞれの好適範囲が推定されました。そして、水温上昇に伴う成長率の低下が、水流の付加によって軽減される可能性が示唆されました。」とある。水流は、速ければ速いほど、多くの栄養分を海藻に与え、さらに、夏場などの暑さで海藻の生長が阻害されるのを水流が冷却装置となって働いて防ぎ、結果として成長を促していることになる。古代人は早くから、海水の流れの速さと海藻の成長の速さの因果関係を認識していたと言えよう。

（**付記**。本稿執筆にあたり、教育学部准教授で地理学がご専門の大平晃久先生のお世話になったことに対し、厚く御礼申しあげる。なお、本稿で使用した島などの写真は、すべて筆者が現地に赴いて自ら撮影したものである。一部見にくい写真があることをご容赦いただきたい。）